特別座談会
ビジネスアイディアの魅力「考える癖　人生豊かに」

高校生が自由な発想で商品やサービスなどを提案する「第16回全国高等学校ビジネスアイディア甲子園」（大阪商業大学、毎日新聞社主催）。今年は全国の140校から7522件の作品が寄せられ、12月16日に最終審査と表彰式が行われる。同大学では、ビジネスアイデアに関して継続的に取り組んでいきたい在学生を対象に、活動の場として「アントレラボ」を提供するなど、アントレプレナーシップ（起業家精神）の育成に力を入れている。アントレラボを利用する学生５人を中心に、その思いや魅力などを語り合ってもらった。



柴田孝准教授　アントレラボでの活動や、現在どんなビジネスアイデアを考えているのかなど教えてください。

成功の喜び原動力

藤川功基さん　ラボでの活動は２年目で、現在は段ボールのイスについて考えています。アイデアを考えるのは苦しいけれど、試作品がうまくいくと「よっしゃ！」って感じで、その瞬間の喜びがあるから頑張れます。１年の時に授業の一環で応募した在学生対象のコンテストで上位に入賞したことがきっかけで、ビジネスアイデアを日々意識するようになり、昨年も連続入賞できました。特に、コンテストの副賞でマレーシアの研修旅行に参加し、海外の学生たちとの意識の差を痛感したことは大きかったです。

片山直人さん　今春からラボに参加し、海外卒業旅行を企画するコンテストに応募するなど活動しています。どんなプランなら喜ばれるかを考えるのはすごく楽しくて、こうした企画が好きだと改めて気づきました。実際に賛同してもらえると、無類の達成感です。将来的にも企画の仕事がしたいと明確になり、とても実りのある活動に

なっています。

一度やってみれば面白い

窪田真己さん　ビジネスアイデア系の公募コンテストはいろいろあり、積極的に応募しています。プリペイドカード機能とウェブ上での学生証明機能を組み合わせたサービスなど、学生だからこその発想を生かして提案できるのはやはり面白いですね。僕自身、大学の授業がきっかけでビジネスアイデアを考えるようになりましたが、とにかく一度やってみると、面白さがわかる気がします。

稲岡保准さん　僕も１年生の時の課題がきっかけで在学生対象のコンテストに入賞したことが、いい経験になりました。最近は、新聞の折り込み広告に代わる、アプリを使った配信サービスを考えています。今年はコンテストで入賞できていないので、リベンジに燃えています。

村上知也さん　僕は実家が兼業農家なので、農家の防犯などを考えています。僕はほかのメンバーより１学年下で、今春からラボに参加したので、アイデアを考えるのは本当に難しいのですが、先生や先輩に相談しながらできるラボの環境に助けられています。やはり自分の興味があることだと、アイデアも考えやすいと感じます。

柴田　高校時代との変化や成長など感じますか？

藤川　高校時代はバレーボールざんまいで、勉強はほとんどしていませんでした。でも１年時のコンテスト入賞をきっかけに、もっといろんなことが知りたいと、選抜制のビジネス・パイオニアコース（OBP）に編入。成長のきっかけは実はいろんなところに転がっていると思います。アイデアを考えるのも同じで、ちょっと視点を変えてみると不満がヒントになる。現在は週１回ぐらいはアイデアを練るよう心掛けています。

片山　正直、この大学は第１希望ではなく、入学当初は少し落ち込んでいました。でも、自分が思いもしなかったことを考えている人や、ビジネスアイデアに出合い、徐々に入学してよかったと思えるようになりました。アイデアを考える時にも共通するのですが、結局相手にヒントが隠されていて周りの人に聞いてみると、とても参考になります。コミュニケーションの大切さを学べたことが、大学での一番の収穫です。

窪田　僕もコミュニケーションの重要性に気づけたことは成長の一つです。グループで一つのものを企画することもありますし、一人で取り組む場合でもラボカフェでいろんな意見を聞くことがとても参考になります。またいいアドバイスを得るためにも、自分の考えをきちんと伝えられることは重要です。

稲岡　アイデアを考える以上に、応募用紙に論理的にまとめていくことの方が僕にとっては難しい。限られた文字数の中でどういう言葉を使えば相手に伝わるのか、苦労しているところで、今後もっと磨いていきたい。またアイデアを発表する際も、短い時間内で理解してもらうことは欠かせないと思います。

興味を探求　思考も変化

村上　高校時代も今も基本的に勉強は苦手で、自分の中の軸は面白いかどうか。ただビジネスアイデアには自分の興味があることを探求できる面白さがあります。少しずつ自分の思考も変わってきました。例えば以前は食事にいっても楽しく食べて終わりだったけれど、この企業はこういう戦略でメニューを工夫しているのかな、などと無意識に考えられるようになってきました。そうした推測ができるようになったことは、自分の大きな進化だと思います。



総合経営学部経営学科３年
藤川 功基 さん



総合経営学部経営学科３年
片山 直人 さん



総合経営学部経営学科３年
窪田 真己 さん



総合経営学部商学科３年
稲岡 保准 さん

チャレンジは知の蓄積

谷岡一郎学長　高校までの教科は暗記すればとりあえず何とかなったかもしれないけれど、世の中は答えのない社会で、考える癖を持っている人と持っていない人で、全然違ってきます。「やるかやらないか迷ったらやる」といつもアドバイスしていますが、やってみることで知の蓄積になります。考えたアイデアが形に残るとは限らないけれど、チャレンジしたことは必ず次につながるし、絶対人生を楽しめます。

柴田　改めて今後の自分の目標や、高校生へのメッセージをお願いします。

藤川　アイデアをどうブラッシュアップしていくかがポイントで、どういうニーズがあるのかを探り、みんなの意見を聞いて取捨選択することも大事です。実家が紙屋で、紙はすごく面白い素材なのに、海外では種類が少なく利便性が知られていない。将来的には世界にその面白さを発信していきたいと考えています。



経済学部経済学科２年
村上 知也 さん

やりがいが自信に

片山　いろんな人に話を聞いてみると、アイデアの参考になるだけでなく、相手と自分の考えの違いを通し、改めて自分のことを見つめ直すことができます。僕の場合、高校生の時の勉強はやらされている感が強かった。でも学長が話されたように「迷ったらやる」は大事で、自ら行動してみるとやりがいもあるし、自分が行動することで周りも変わり、自分の自信にもなると思います。

窪田　僕は将来的にはアパレル関連で起業できればと考えています。ビジネスアイデアというとつい難しく考えがちですが、そのアイデアで自分の生活が楽になると思うと、すごく楽しい。普段からちょっとした不満を意識して、メモするなど工夫してみるといいと思います。

主観に客観性取り入れ

稲岡　僕の好きなサッカーになぞらえると、試合を見るのは楽しいけど、やはり単に見るより、自分でやってみる方がはるかに楽しいはずで、苦しい時もあるけれど、それを上回る達成感があります。自分の暮らしがどうしたらよくなるかという主観的な視点でのアイデアが、友達などの客観的な目線を取り入れると良くなることが多く、ぜひ挑戦してみてください。

村上　将来的に農業関連での起業を考えています。農業は結局は食べることであり、まず自分が楽しくやるのが基本だと思っています。農業というと難しそうだし、他人任せにすれば楽なのかなという気もしますが、自分も楽しみながら国の生産量が増えたらいいなと考えています。

積極的挑戦を

柴田　高校生にも積極的にビジネスアイデアにチャレンジしてみてほしいですね。

（2017年11月18日　毎日新聞朝刊）

継続的研究の場「アントレラボ」
「主体的学びの助けに」

アントレラボは、在学生対象の「大商大ビジネス・アイディアコンテスト」に入賞した学生などが入居。今春完成した新校舎「ユニバーシティ・コモンズリアクト」にあり、午前９時～午後８時まで利用することができる。昨年度からは、毎週水曜日の昼休みに「ラボカフェ」を開催。ラボ利用学生と教員が、一緒に食事をして交流を図りながら、幅広い話題でディスカッションを行っている。柴田准教授は「ラボでアイデアを考えたり、ビジネスの研究をしていく過程で、まだまだ知らないことがたくさんあることに自ら気づき、必要な知識や概念を習得するために講義を履修するなど、主体的に学んでいく助けになれば」と話している。



学長
谷岡 一郎

専門は犯罪学、ギャンブル社会学。「科学研究とデータのからくり」（PHP 新書）、「こうすれば犯罪は防げる環境犯罪学入門」（新潮選書）など。



准教授
柴田　孝

専門は国際経済学。水産資源に関する多国間交渉などが研究テーマで、貿易論や開発経済学も担当。